

## ヨハネによる福音書17章6－26節 「父への子の祈り ②」

### 1A 子の栄光 1－5

1B 永遠のいのちの付与 1－3

2B 天の御座にある栄光 4－5

### 2A 御名による守り 6－19

1B みことばを受け入れた弟子たち 6－8

2B 世からの守り 9－16

3B 真理による聖別 17－19

### 3A 一つになる祈り 20－26

1B 父と子の一一致 20－23

2B 天における集まり 24－26

## 本文

ヨハネ 17 章 6 節から学びます、私たちは午前礼拝で 1-5 節をじっくりと見てきました。父なる神に対して子なるイエス様が祈りを捧げておられるところを見ています。弟子たちに語られた後に、主は天を見上げて、彼らの聞いているところで祈られました。その祈りは、父にある子の栄光を現してください、というものです。それが、復活し、栄光の姿で現れることなのですが、その栄光の姿には、なおのこと十字架の苦しみの傷跡が残っているというところの栄光です。

### 2A 御名による守り 6－19

次にイエス様は、弟子たちのために祈られます。ご自身と一緒にいた十一人の弟子たちのために祈られます。十二人を選んでおられましたが、イスカリオテのユダはイエス様を裏切りました。ですから十一人です。

#### 1B みことばを受け入れた弟子たち 6－8

6a あなたが世から選び出して与えてくださった人たちに、わたしはあなたの御名を現しました。彼らはあなたのものでしたが、あなたはわたしに委ねてくださいました。

イエス様は、世において彼らが憎まれることを、先にお語りになっていました。その時に、憎まれる理由をこう話しておられました。「15:19b わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。」世というのは、神に逆らうサタンが支配する世界のことです。その支配の中に全世界があるのですが、しかしイエス様が彼らを世から選び出しておられました。それゆえ、彼らが自分のものであったはずが、そこから抜き出されたので、世は憎みます。彼らを憎んでいるのではなく、彼らが神のもの、キリストのものにされているから憎んでいるのであります。

神とキリストを憎んでいるのです。イエス様は、そうした世において彼らが守られることを祈り始めます。私たちも、同じ祈り、執り成しが必要ですね。

主は、ここで「わたしはあなたの御名を現しました」と言われています。その御名というのは、父の本質、その栄光の核の部分を表しています。かつてモーセが、神の名が尋ねられたら、民にどう答えればよいでしょうと神に聞いたら、神がご自分の名を現してくださいました。「出エジ 3:14 わたしは、『わたしはある』というものである。」そして、主という名、これを YHVH と言って、ヤハウェではないか？と言われています。神は、偶像と異なり、何かに制限される存在ではなく、永遠ですべてを超越している方、人に定義されることのなく存在しておられる方として、「わたしは、ある」と宣言されました。それと同時に、偶像は人の必要、欲望を満たす存在としてありました。この方こそが、どんな時もその人に必要になるということで、「わたしは、ある」と宣言されました。

イエス様は、「わたしはある」という名によって、ご自身を現わされました。父の御名を現されました。人々が、食べ物がほしくてイエス様のところに来た時、「6:35 わたしがいのちのパンです。」と言われました。パンをくれる人ではなく、この方ご自身がいのちのパンだと言われたのです。そして、「8:12 わたしは世の光です。」と言われました。人にある闇が、この方にあって照らされます。へりくだり、悔い改めて光のところに来れば、その罪はすべて清められます。そして、「10:7 わたしは羊たちの門です。」そして、「11:25 わたしはよみがえりです。いのちです。」そして、「14:6 わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」「15:1 わたしはまことのぶどうの木」と宣言されました。人々が、自分たちの欲するものは偶像になりましたが、それらの偶像を排して、ただわたしだけに必要があるということを、語られたのです。

「わたしは、ある」という御名をそのまま使われた時もありました。弟子たちが向かい風で舟をこぎあぐねている時に、水の上を歩かれてきましたが、弟子たちが恐れました。それで、「6:20 わたしだ。恐れることはない。」と言われました。この「わたしだ」というのが、神の御名なのです。水の上を歩かれて、そして、嵐を静められる。その実体を目の当たりにして、「わたしだ」とイエス様は宣言されたのです。弟子たちは、父なる神がだれか、その御名をイエス様が示されたことによって、知ることができました。

そして、イエス様が 12 人を選ばましたが、それは、父がイエス様に与えられ、委ねられた者たちだと言われています。主は、12 人を選ばれる前に山で祈って夜を明かされました（ルカ 6:12）。主は弟子たちと共におられましたが、決してご自身の所有のものと思っておられなかった、あくまでも父がわたしにくださった者たち、ということでした。私たちにも、誰かが自分に与えられた時、その人は自分のものではなく、神がくださった人だから、だからイエス様を示していくということです。

6b そして彼らはあなたのみことばを守りました。7 あなたがわたしに下さったものはすべて、あな

たから出ていることを、今彼らは知っています。8 あなたがわたしに下さったみことばを、わたしが彼らに与えたからです。彼らはそれを受け入れ、わたしがあなたのものとから出て来たことを本当に知り、あなたがわたしを遣わされたことを信じました。

弟子たちは、「あなたのみことばを守りました」とあります。これまでの弟子たちを見て、守っているかどうか分からぬこと、失敗もたくさん繰り返していますね。けれども、イエス様は守ったとみなしておられます。それは、献身において守っていたのです。つまり、イエス様にしか永遠のいのちのことばはない、として、この方にどんなことがあってもついていくと決めていたのです。カペナウムで多くの弟子たちが去って行った後に、イエス様は、「あなたがたも離れて行きたいですか。」と尋ねられると、ペテロがきっぱり、答えました。「6:68 主よ、私たちはだれのところに行けるでしょうか。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。」この方にしか、いのちの言葉はない、他のどこに行ってあるのだろうか？もう振り返りません、ということです。

そうした中で、彼らは、イエス様は神からのことばを語っていることを知っていました。だから、イエス様は神から来られた方であることも本当に知って、信じていました。こういう人たちは幸いです、イエス様にしか、いのちの言葉はない。だから、この方から離れない。そう決めてしまうなら、この方によって、神を本当の意味で知ることができます。

## 2B 世からの守り 9-16

9 わたしは彼らのためにお願ひします。世のためにではなく、あなたがわたしに下さった人たちのためにお願ひします。彼らはあなたのものですから。10 わたしのものはすべてあなたのもの、あなたのものはわたしのものです。わたしは彼らによって栄光を受けました。

ここから、彼らのためにイエス様は父に願われます。彼らは父のものなのですが、父と子は一つです。「わたしのものはすべてあなたのもの、あなたのものはわたしのものです」と言われています。父のものなのですが、子のものであるので、彼らによってご自身が栄光を受けたと言われています。ここで言っているのは、直訳としては「彼らの中で栄光を受けました」ということです。つまり、彼らの働きで栄光を受けたのではなく、彼らが弱き存在、取るに足りない存在だったとしても、その中にイエス様の栄光が現れたということです。

使徒パウロが、似たようなことを話しています。自分自身は教会を迫害した者でした。そこで言っています。「I テモ 1:15-16 「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。しかし、私はあわれみを受けました。それは、キリスト・イエスがこの上ない寛容をまず私に示し、私を、ご自分を信じて永遠のいのちを得ることになる人々の先例にするためでした。」罪人の頭なのですが、キリストの寛容が人々に自分を通して現れて、それで永遠のいのちを得ることができるようにしてくださつ

ている、と話しています。私たちもそうではないでしょうか？私に問わらず、主が私をとおして、ご自分の恵みの栄光を現してくださいます。

11 わたしはもう世にいなくなります。彼らは世にいますが、わたしはあなたのものとに参ります。聖なる父よ、わたしに下さったあなたの御名によって、彼らをお守りください。わたしたちと同じように、彼らが一つになるためです。

ここが、彼らのための願いになります。主が父のところに行かれるので、彼らがこの世から聖別されて、守られるように祈っておられます。「聖なる父よ」と呼んでおられます、それは世から別たれた方ということです。そのあなたが、彼らを世から守っていてください、聖さの中に保っていてください、ということです。イエス様によって父の本質、御名が明らかにされたので、その中において彼らを守っていてくださいと祈られています。これは、私たちにとってとても大きな課題ですね。けれども、ここでわかる通り、主がこのように前もって祈ってくださっているのです。私たちが、神の愛に留まり、祈るということは大事であると同時に、例えばユダの手紙ではこうあります。「24 あなたがたを、つまずかせないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びとともに栄光の御前に立たせることができる方」

そして目的が、「彼らが一つになる」ということです。神は三位一体の神です。父と子は一つであり、聖霊ももう一人の助け主であり、一つです。そこに神の聖さがあり、使徒たちがその中で一つになるように主が願っておられるのです。使徒の働きや手紙を読みますと、その祈りは聞かれています。使徒パウロは異邦人への使徒であり、ペテロはユダヤ人への使徒であるけれども、エルサレムにパウロが行った時に、ペテロ、ヨハネ、またヤコブが交わりのしるしとして、右手を差し伸ばしたと、パウロは書いています(ガラテヤ 2:9)。それぞれが異なる働きをしていても、人間的には異なるメッセージを語っているように見えても、いや、実は同じキリストを宣べ伝えており、同じキリストを向いて動いていたのです。

12 彼らとともにいたとき、わたしはあなたが下さったあなたの御名によって、彼らを守りました。わたしが彼らを保ったので、彼らのうちだれも滅びた者はなく、ただ滅びの子が滅びました。それは、聖書が成就するためでした。

主が、神の御名によって弟子たちを守ってくださいました。それは、律法学者が来て、弟子たちが安息日にしてはならないことをしていると非難した時も、イエス様が擁護し、彼らのほうが誤っていることを指摘されました。またイエス様は最後まで愛してくださいました。そして、弟子たちの足を洗い、仕えることについて手本を示されました。ペテロのことをサタンが篩にかけることを知って、主は父に執り成し、信仰がなくならないように守られました。このようにして、彼らが神の牧場の羊であるようにして、彼らを養い、愛し、仕え、導かれていったのです。

そして、「彼らのうちだれも滅びた者はなく」とあります。これが、すごいことです。主は善き羊飼いです。たった一匹の羊がさまよい出ようとも、残りの九十九匹を置いてでも、捜していって見つけるような方です。どんなことがあっても、主は善き羊飼いで、自分の命を捨ててでも助け出すお方であることを私たちは知っています。だから、だれも滅びた者はいないのです。

けれども、そのイエス様をしてさえ、イスカリオテのユダは十二人の間から出て行つたのです。それは、詩篇 41 篇 9 節にある、パンを食べる親しい友がかかとを上げるという聖書の箇所が成就するためであり、「滅びの子」であったというのです。神学の中で、救いについて、救われるように選ばれた者と、滅びるように定められている者たちがいるという、予定論という神学の教えがあります。二重予定論と言いますが、これは明白な御言葉の宣言に反しています。「I テモ 2:4 神は、すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。」神は、救われる人を選ばれますが、滅ぶように選ぶことは書かれていませんし、それは全ての人を救うことを願つておられる神の心に反します。しかし、ここでははっきりと、イスカリオテのユダについては「ただ滅びの子が滅びました」とあります。イエス様は彼も悔い改めるように願われましたが、それでも聖書の預言通りのことが起こったのです。

イエス様はここでも、父が下さった者たちを守り、その下さった者たちはひとりとして滅びませんでしたが、そうでない者については、主ご自身も父にお任せしておられたということです。羊の群れに属さない者たちが、教会の中にも存在する現実を教えています。使徒ヨハネは、反キリストの教えを持っている者たちがいたけれども、仲間から離れて行ったことを第一の手紙で話しています。「I ヨハ 2:19 彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし仲間であったなら、私たちのもとに、とどまっていたでしょう。しかし、出て行ったのは、彼らがみな私たちの仲間でなかったことが明らかにされるためだったのです。」人々、仲間でなかったことを主が明らかにされたということです。

13 わたしは今、あなたのものとに参ります。世にあってこれらのこと話をしているのは、わたしの喜びが彼らのうちに満ちあふれるためです。

イエス様が、まだ地上におられるうちにこのことを語られることによって、このことを弟子たちが思い出し、天に昇られてから、喜びに満ちることができるようになります。それは、確かに主が世に打ち勝ち、よみがえられたということ。主は再び戻ってきてくださるということ、この希望があるので、喜びに満ちていたのです。ルカによる福音書がそのことを書き記しています。「24:50-53 それからイエスは、弟子たちをベタニアの近くまで連れて行き、手を上げて祝福された。51 そして、祝福しながら彼らから離れて行き、天に上げられた。52 彼らはイエスを礼拝した後、大きな喜びとともにエルサレムに帰り、53 いつも宮にいて神をほめたたえていた。」

主は、私たちに、御父と御子との交わりにおいて、また互いの交わりにおいて、喜びが満ちあふれると約束しておられます。「**I ヨハ 1:3-4** 私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。これらのこと書き送るのは、私たちの喜びが満ちあふれるためです。」

14 わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではないからです。15 わたしがお願ひすることは、あなたが彼らをこの世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。16 わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではありません。

イエス様は先ほど、弟子たちに世が憎むことを語られました。イエス様がこの世のものでないのであれば、父が子にくださった彼らもこの世のものではありません。だから憎みます。しかし、イエス様の願いは、「彼らをこの世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださること」です。彼らには、そして私たちにも、苦しまないという約束は与えておられません。悪い者から反対や攻撃がなくなることを約束していません。世に患難があるからといって、患難から免れさせるようには約束されていません。世には患難があると、イエス様は明確に言われました。ところで、患難といつても、世の終わりに下る神の怒りとしての患難があります。神の怒りからは救われる所以、大患難とも呼ばれる、ダニエルに預言された、定められた第七十週目に起こる患難は免れます。しかし、世がもたらすところの患難からの免れるようには召されていません。

しかし、悪い者から守られるとは約束されています。これだけでも、一つのメッセージができるでしょう。使徒たちの手紙でどこにおいても、苦しみをテーマにしています。そして苦しみがもたらすものを説明しています。ヤコブの1章を見てみましょう、「**ヤコブ 1:2-4** 私の兄弟たち。様々な試練にあうときはいつでも、この上もない喜びと思いなさい。あなたがたが知っているとおり、信仰が試されると忍耐が生まれます。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは何一つ欠けたところのない、成熟した、完全な者となります。」忍耐と品性が生まれ、神の愛を知ります。

### 3B 真理による聖別 17-19

17 真理によって彼らを聖別してください。あなたのみことばは真理です。18 あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。

主は、彼らを選び出し、彼らを憎む世から守ってくださるように祈りました。けれども、それは消極面です。「**真理によって彼らを聖別してください。**」と言われています。聖別とは、主だけの御用のために別たれることです。神殿の聖所において、そこで用いられるものはすべて、聖別されました。器といつても、世の中に無数の器があります。けれども、この器はそこから別たれて、主に対する

奉仕、礼拝のためだけに用いられます。それが聖別されるということです。そして、祭司も聖別し、彼らは主に仕えるために、その務めのため他の人々から聖め別たれるのです。

かつて、聖別されるためには、いけにえを屠った血があてがわれました。そして水洗いもあります。イエス様はここで、「真理によって」と言われています。イエス様がご自身の血を流し、それを信じる者ひとりひとりの良心に注がれます。そして、水の洗いは御靈によって成し遂げられます。ですから新約時代、私たちはキリストの流された血を信仰によって心から信じ、そして御靈によって洗われたことを信じます。新約時代において必要なのは、みことばです。主の語られることばによって、清められることを、ぶどうの木で多くの実を結ぶために、みことばによって洗われることを、イエス様は 15 章でお語りになっていましたね。イエス様についての真理について、その真理のことばによって聖別されるのです。

そして、聖別によって、イエス様が弟子たちをご自身が父から遣わされたように、遣わします。イエス様は復活された後に、弟子たちに言されました。「20:21 平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」これにならって、アンティオキアの教会で、指導者たちがパウロとバルナバを聖靈によって遣わしました。「使 13:2-3 彼らが主を礼拝し、断食していると、聖靈が「さあ、わたしのためにバルナバとサウロを聖別して、わたしが召した働きに就かせなさい」と言われた。そこで彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いてから送り出した。」

イエス様は、悪い者が支配する世に遣わされました。しかし世を愛されます。神についている方、神のものとされている方なのに、世を愛し、そこにいる者たちを選び出されるのですから、そこにはその使命を果たすのに、神からの聖別がどうしても必要なのです。宣教地において、そこには文化があります。その文化は神の栄光を現すかもしれません、罪によって神を知るのに妨げになるかもしれません。例えば、日本では和の文化はすばらしいですね、人への気遣いがあります。けれども、正しいこと、真実なことを行わなければいけないのに、和を崩さないために人を恐れて行わないとしたら、それは罪です。ですから、私たちが人々のところにイエス様によって遣わされて、そこでイエス様を表すには、自分がその人たちの間に住みつつも、自分自身は神につながっていないといけないです。そこで必要なのが聖別です。

19 わたしは彼らのため、わたし自身を聖別します。彼ら自身も真理によって聖別されるためです。

イエス様がここで言われている、ご自身を聖別するとは、ご自身が罪のための供え物になるという父の御心を全うする意味で言われています。主はこのためにこそ来られたのであり、これから、罪人に渡されるという使命、罪を背負われるという使命の中に入ります。そのためには、父の御心のみを行なうための聖別が必要だということです。ゲッセマネの園での祈りがそれに当たります。

そして、その犠牲によって、先ほど説明したように、かつて祭司が血による、水洗いによる聖別ではなく、真理のことばのみによる聖別を受けるのです。

### 3A 一つになる祈り 20-26

こうしてイエス様は、ご自身の栄光のために祈られ、次に弟子たちのために祈されました。今度は、弟子たち、使徒たちによって信じていく者たちのために祈られます。ですから、直接、私たちのために祈られた祈りです。

### 1B 父と子の一致 20-23

20 わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにも、お願いします。21 父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるようになるためです。

使徒たちが一つになるようにという祈りをイエス様は捧げられましたが、今度は、彼らのみことばの宣教の働きによって信じていく者たちにも、つまり私たちにも一つになるように、という大きな祈りを主は捧げておられます。その土台となっているのが、三位一体の神のうちにある一致です。これまで私たちは父と子の関係、その一体の関係を見ました。その関係が、私たちの間にも及ぶように、という祈りです。これがイエス様の大きな意図でした。

なんと今、この祈りが必要でしょうか？社会が分断されている時代に生きています。互いに責め合い、互いが敵であるかのような様相を呈しています。教会でさえが、その世の流れに呑み込まれそうです。教会の中でも事実、戦いがあります。まだキリストにあって幼子で、肉的であってコリントの教会の信者は、私はパウロに付く、私はケパにつくなどといって、分裂していました。そして、ピリピにおいては、教会の働き人、女性二人が対立していたので、そのためにパウロが手紙を書いたといっても過言ではありません。そして教会史において、分裂から分裂の悲しい歴史を辿っています。イエス様が祈られたことは、人間には不可能でさえ見えます。

しかし、聖霊の力によって私たちは、主の祈りを思い起こすべきです。そうでなければ、どうして神を信じ、イエス様を信じるのでしょうか。父が子のうちにおられて、子が父のうちにおられるように、その一体の神が私たちのうちにおられるのですから、私たちのうちにても一体が生まれるのです。聖餐式は、まさにそれを目に見える形で実践するのです。キリストの体を表す一つのパンを裂いて、分けて食べます。キリストの血潮を表す杯を取って、飲みます。キリストにあって、一つにされるのです。パウロが、こう教えました。「エペ 2:14-16 実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、15 様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、この二つをご自分におい

て新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、16 二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」

そして、目的は、「あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるようになるためです。」ですね。これと似たような言葉をイエス様は、「互いに愛し合いなさい」のところで語られました。「13:35 互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。」多くのクリスチャンが大きな間違いを犯しています。伝道したい、周りの人たちに証ししたいと思っているのに、教会の中で一つにならず、自分の意見や思いで動いていたら、最も伝道の妨げになります。私たちが一つになっていること、互いに愛があること、これによって、世が私たちがキリストの弟子であり、またキリストを信じるようになるのです。

22 またわたしは、あなたが下さった栄光を彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。 23 わたしは彼らのうちにいて、あなたはわたしのうちにおられます。彼らが完全に一つになるためです。また、あなたがわたしを遣わされたことと、わたしを愛されたように彼らも愛されたことを、世が知るためです。

神の栄光が、信じる者に与えられるとあります。コリント第二 3 章 18 節には、「栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御靈なる主の働きによるのです。」とあります。そしてその栄光は、私たちが一つになるためとあるのです。やはりここでも、私たちがキリストに似た者になること、神の栄光を反映させることと、一つになっていることはつながっているのです。私たちが一致していなければ、私たちは目立ちますが、神の栄光は見えなくなります。一つになっているときに、三位一体の神の栄光が輝きます。そして、私たちが一つになっていることによって、確かに私たちが主から愛されていることが、私たちが完全に一つになっているところで現れて、それで世がキリストを信じるようになります。

## 2B 天における集まり 24-26

24 父よ。わたしに下さったものについてお願ひします。わたしがいるところに、彼らもわたしとともにいるようにしてください。わたしの栄光を、彼らが見るためです。世界の基が据えられる前からわたしを愛されたゆえに、あなたがわたしに下さった栄光を。

私たち信じる者たちのためのイエス様の祈りは、一致の次に、天において主の栄光を見ることです。父のふところにある独り子の神としての栄光を見ることです。このことによって、ご自身が地上から天に昇られたように、私たちもキリストにあって罪の中に死んでいたのが生かされ、そして天に引き上げられます。キリストが天に住まいを用意され、私たちをそこに住まわせてくださるのであります。黙示録で、教会が主を賛美し、礼拝している姿を幻の中で見ます。「5:9-10 彼らは新しい歌を歌った。「あなたは、巻物を受け取り、 封印を解くのにふさわしい方です。 あなたは屠られて、

すべての部族、言語、民族、国民の中から、あなたの血によって人々を神のために贖い、私たちの神のために、彼らを王国とし、祭司とされました。彼らは地を治めるのです。」」私たちは、父に愛されたイエス様の栄光を、このようにして仰ぎ見て、歌をうたうのです。

25 正しい父よ。この世はあなたを知りませんが、わたしはあなたを知っています。また、この人々は、あなたがわたしを遣わされたことを知っています。 26 わたしは彼らにあなたの御名を知らせました。また、これからも知らせます。あなたがわたしを愛してくださいた愛が彼らのうちにあり、わたしも彼らのうちにいるようにするためです。」

イエス様の最後の祈り、呼びかけは「正しい父よ。」であります。これは、イエス様が子として、父がご自分のしてくださっていることを認めてくださることを期待している言葉です。世は神を知らないが、イエス様は知っている。そしてイエス様は、神の御名を私たちに知らせた。またこれからも知らせてください。そのことで、父から受けた愛を彼らのうちにもあり、イエス様が彼らの内におられる。そこまでされているので、これまでの願いが、一つになるということがかなえられるように、ということであります。執り成して、父に対して訴えておられるのです。

すごい祈りです。ご自身の栄光から始まって、使徒たちのため、そして使徒たちを通して信じていく者たちのため、つまり私たちのことですが、私たちが神の御名を知り続ける、そして、神の愛が私たちにあるようにする、と主は言われています。これだけのこと行なうから、正しい方であるあなたは、これまでの私の祈り、天に私たちがいるようにすることもかねえてください、と祈られています。イエス様が祈られているのですから、私たちはすごい愛されています。ものすごい執り成しを受けています。そのことを自覚して、神に愛された者として生きていきましょう。